

## MTP 運用におけるワーキンググループの取り組みと輸血部の関わり

◎加藤 美加<sup>1)</sup>、長沼 良子<sup>1)</sup>、五十嵐 光紅<sup>1)</sup>、竹田 光<sup>1)</sup>、植木 哲也<sup>1)</sup>  
山形県立中央病院<sup>1)</sup>

【はじめに】当院ではこれまで緊急輸血対応を問題なく実施してきたが、急患室より大量輸血プロトコル(Massive Transfusion Protocol、以下 MTP)運用の要望があり、2023 年 5 月にワーキンググループ(以下 WG)が発足した。WG が運用開始に向けて検討・準備したこと、経験した MTP 症例の振り返りをもとに WG と輸血部が改善してきた内容や取り組みを紹介する。

【背景】WG は救急科医師、急患室看護師、輸血部看護師、輸血部検査技師、集中系病棟看護師の計 10 名で構成され、運用開始に向けて発動条件と状況に応じたオーダー内容、フローチャート(Step1~3)の作成、在庫数の見直し、関係部署への周知等について検討した。救急科医師が中心となり、説明会、動画視聴、各部署での研修会を経て 2024 年 3 月より MTP 運用が開始され、2025 年 3 月までに 13 件の症例を経験した。

【改善点と取り組み】MTP 症例ごとに WG 内で振り返りを行い、急患室と輸血部でそれぞれ時系列を作成し、問題点や気づいた点に関しては職種を問わず意見を出し合い改善

してきた。AB 型赤血球の在庫数、採血困難時の検体量や血液製剤の保管など、輸血部の意見も多く取り入れてもらうことができた。現在も全症例について WG 内で振り返りを行うとともに、新たな取り組みとして 3 か月毎に MTP シミュレーションを実施している。

【効果と課題】MTP 運用開始から 1 年経過した時点で、WG と輸血部ではそれぞれ救急科医師と急患室看護師、検査技師にアンケートを実施した。回答結果から、緊急時の血液製剤準備に関する意識や判断の向上、連絡体制のスムーズ化などの効果が感じられた。一方で、MTP 発動対象症例および発動可能医師の拡大といった課題も見えた。

【結語】MTP 運用に向けて結成された WG と輸血部が共働することで、多職種間で良好な関係を築けている。現行の MTP は発動権限を救急科医師、対象を重傷外傷患者に限定しているが、今後は他科の医師でも発動可能で、外傷だけでなく産科危機的出血にも対応できるように多職種連携を図りながら業務拡大を目指したい。

連絡先：023-685-2626(内線 3334)

## 岩手県立病院における認定輸血検査技師の資格取得支援活動について

◎内藤 呂美<sup>1)</sup>、藤原 教徳<sup>2)</sup>、千葉 由紀<sup>3)</sup>、小穴 夏子<sup>4)</sup>、佐藤 了一<sup>5)</sup>、佐藤 優一郎<sup>3)</sup>  
岩手県立宮古病院<sup>1)</sup>、岩手県立磐井病院<sup>2)</sup>、岩手県立中央病院<sup>3)</sup>、いわて飯岡駅前内科クリニック<sup>4)</sup>、岩手県立大船渡病院<sup>5)</sup>

### 【はじめに】

岩手県立病院は9の基幹病院、11の地域病院、6の地域診療センターがあり、全国随一の公的医療機関である。岩手県立病院の経営計画2019-2024には、「それぞれの病院機能に必要な認定資格種の取得者を確保し、将来にわたり安定的な育成を目指す。」とあり、育成を目指す支援対象の資格は超音波検査士、認定輸血検査技師、細胞検査士、感染制御認定臨床微生物検査技師の4種である。輸血検査業務は、どの基幹病院でも行っているが、認定輸血検査技師が在籍している施設は少なく、資格取得希望者がいても自施設のみでは育成が困難である。岩手県立病院では、認定輸血検査技師がいる施設で行う資格取得の支援活動をしているので、その内容について報告する。

### 【方法】

毎年5月上旬に資格取得者在籍調査を行い、7月上旬に支援対象希望者の有無を調査する。10月頃から資格取得者と支援対象者で日程を調整し、3回程度に分けて講義や実習などの支援を開始する。1回目は試験概要やカリキュラム

について、2回目は1次試験に向けての症例問題や計算問題など、3回目は2次試験に向けて模擬実技試験を行っている。

### 【結果】

2019年に1名、2022年に2名が2次試験向けの模擬実技試験を行った。2022年に受講した2名が2次試験に合格し、認定輸血検査技師が増員となった。今後3名が受験予定であり2023年以降、適宜資格取得に向けての支援を行っている。

### 【考察】

2019年から取り組みを開始し、2名の認定輸血検査技師を育成することが出来た。9の基幹病院に各1名の認定輸血検査技師を配置する目標で開始され、現在は5名4施設まで増加した。今後も目標を達成できるように支援を続け、認定輸血検査技師の育成に励みたい。

連絡先：岩手県立宮古病院 臨床検査技術科  
0193-62-4011(内線 2245)

## 新潟県立病院における若手技師向け輸血研修の開催

◎大熊 京香<sup>1)</sup>、小林 健太<sup>2)</sup>、見邊 典子<sup>3)</sup>、阿部 千尋<sup>3)</sup>、高橋 一哲<sup>4)</sup>、草間 孝行<sup>5)</sup>

新潟県立中央病院<sup>1)</sup>、新潟県立津川病院<sup>2)</sup>、新潟県立がんセンター新潟病院<sup>3)</sup>、新潟県立新発田病院<sup>4)</sup>、新潟県立十日町病院<sup>5)</sup>

【背景】新潟県立病院では、毎年新入職員に対して輸血の基本的な知識や検査手技に関する実技研修会を行っている。しかし、新型コロナウイルスの蔓延により、2020年度から2022年度においては集合型の実技研修会を開催することができなかった。今回、新たな試みとして実技研修会を受講できなかった若手職員を対象に、輸血の基本的な検査手技を再確認し、日常業務に役立ててもらうことを目的に実技研修会を開催したので報告する。

【内容】研修内容は、試験管法による ABO 血液型検査と、患者急変による緊急輸血への対応を想定した模擬演習を行った。受講者は3名で、講師は新潟県立病院に在籍する認定輸血検査技師が務めた。終了後に、受講者にアンケートを行った。

【結果と評価】2~3年の若手職員は、当直業務として輸血検査を担当する機会はあるものの、普段輸血検査に関わっていないため、試験管法の操作に不慣れな様子が見受けられた。また、緊急輸血時の製剤血液型選択や、診療現場とのやりとりで戸惑う場面もあった。研修後のアンケートで

は、基本的な検査手技の再確認ができたこと、緊急輸血において優先すべきことや診療現場への対応について学ぶ機会を得た点が有意義だったという感想が寄せられた。また、マンツーマン形式での指導により、疑問点が適宜質問できた点が評価された。

【考察】今回の研修は、内容を新人向けのものから発展させ、緊急輸血に関する内容を加えたことで、より実践的な輸血検査業務について学ぶ機会になった。輸血過誤や緊急輸血への恐怖心から、経験の浅い技師は輸血検査への苦手意識を持ちやすいが、今回の研修会で参加者の輸血へのマイナスイメージを払拭するきっかけになったと考える。

【結語】普段輸血検査に携わらない技師に対して、トレーニングの機会を設けることは重要であることを再認識した。今後も継続して若手技師向けの研修会を開催することで、輸血療法の理解を深めるとともに、輸血検査の技術の底上げをすることができ、ひいては新潟県立病院全体における安全な輸血医療に寄与できると考えられる。  
連絡先：新潟県立中央病院 025-752-7711（内線 2550）